
神様のいるところ

明星 幽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様のいるところ

【コード】

N8872R

【作者名】

明星 幽

【あらすじ】

自身の境遇に疲れた少女は、今まで暮らしてきた土地を出て、辺境の村へと移り住む。

それは、悲しみを背負った少女が、優しい神様に出会う、小さな小さなお伽話……。

(前書き)

はじめの投稿作品です。
くれぐれも過度な期待はなさない様に。

神様のいるところ

黒に染まった上空に、光々と星々が煌めく夜空を見上げ、少女はそっと溜息をついた。

短めのショートヘアの黒髪に、穏やかだけど何処か寂しげな色が浮かぶ黒に近い藍の瞳。

身体は華奢で低く、実年齢が十六歳なのに対し、幾分か幼く見えた。

一言で言うなら間違い無く「美少女」だろう。

しかし、彼女が今まで過ごしてきた環境を考えれば、ただただ幸せに大切に育てられ暮らしてきた愛らしい少女とはとても言えない。

幼い頃に事故で両親を失い、お金持ちなだけあって親戚一同から財産を狙われ、何とか全て手元に置けた後は命を狙われ故郷を離れ、移った街で通い始めた学校でも金持ちだと言う理由で金を貢がされ、断った後にはいじめが起きた。

正に悲惨。

その一言に尽きる様な壮絶な十六年間の毎日を、彼女はただ一人奮え、震えながらも強い意志を貫いて生きて来た。

けれど・・・

「・・・疲れた」

少女がぼつりと呟く。

澄んだ鈴の様に夜風に乗って響く綺麗な声は、しかし何処か空虚で。

十六年間の長きに渡る日々は、彼女の心を悲しみと苦痛で氷らせた。

冷たく凍えた氷は融ける事を知らず・・・しかし水になる事を願って、彼女の足をこの地に向かわせた。

いっみむら
幸神村。 僅かに垣間見えた俗説では、幸せを呼んでくれる神様が住む守護された村。

知る人ぞ知る聖地で、四方を綺麗で深い森に囲まれた森の中に存在する、完全に下界と隔絶された辺境の村である。

彼女も、丁度一週間前になる日の夜遅くまでインターネットについて苛立ちを紛らわせていなかったら、きっと名前すら知らずに生涯を終えただろうと思える程に、極々僅かな人々が知っているこの村は、彼女のいる街から丸一日掛かり、アパートを出るだけの支度をするだのこの村での家を借りるだので色々時間が掛かってしまい結局真夜中の現在に着く事になってしまった。

それでも、前の街にいた時は見れなかった美しい夜空を見れた事の嬉しさ、光源が少ない為に周りが暗く不安になると言う、今では殆ど忘れていた二つの心境に不思議と心が躍るのを感じ、少しばかり覚束ない足取りながらも、所々に光を放っている家々が点在する何処か神秘的な村の中をゆっくりと歩いて自宅へ向かってゆく。

十分位歩いただろうか。

目の前に少し古ぼけた一軒の和風な平屋が現れる。

彼女は玄関の前に立ち、自らの名字が書かれた真新しいプレートを確認した後、ゆっくりと少し重たい扉を横にスライドさせて中に入る。

扉を閉めてから、広々とした自然石で作られた玄関の中で靴を脱いで、木の廊下にかかる。

近くにあったスイッチを押して玄関口の電気を付けて夜の闇を追いやり、暫し周りを眺めた後、左に少しだけ続く廊下の先がトイレだと確認すると、とりあえず前方に続く廊下を進んでみようと思いついてゆっくりと進んで行く。

角や行き止まりは無く、横にあったお風呂と広い和室の部屋の前を確認しながら通り過ぎて、前方にひっそりと存在するふすまを開くと、少し小さめの和室に行きついた。

中に入って電気を付け、黒い色の木の机の側に持っていた旅行鞆を下して、一息つく。

「大きいのね・・・」

部屋の予想外の広さに溜息を吐きつつも、ここなら落ち着いて暮らせそうだと確認した後、前方、部屋の一面を占領して並ぶ障子に

小首を傾げつつ近づき、そっと開いてみる。

途端に見えた景色に、

「う、わぁ！」

と声を上げる。

何年かぶりに上げた感嘆の声に自分でも驚きつつも、目前に広がった光景に目を奪われた。

障子を開けた先にあったのは、広々とした縁側。

そして縁側の先には、緑の芝生に覆われ、所々に花を咲かせた庭。その先に並ぶ樹によって続く深い森。

今まで何だかんだで家が周りにある場所に住んでいた為、これ程まで森に近い家が存在して、尚且つそこに自分が住む事になるなどとは想像もしなかった。

彼女は素直に驚いて、暫し夜でも神秘的な光景をじっと眺めた後、温かい日にはここで日向ぼっこをしよう、と心に決めて障子を閉め、バックの中に戻ってあった厚手のタオルケットを引っ張り出し、流石にこの時間になると睡魔には勝てず、そのまま畳に横になってその部屋で一夜を明かしたのだった。

翌日、久々に清々しい気分が目覚めた事に喜びつつ、自身の予想より些か早い時間帯に起きたので、リビングを見つけて簡単な朝食を作って食べた後、昼頃まで全ての部屋の確認をしながら私物の整理をして時を過ごした。

昼前になってやっと落ち着き、早々に気の良い住人達に挨拶をすませて、見事お気に入り確定された縁側で近くに住む優しいおばあさんに貰ったお餅を昼食にして寛ぐ。

鮮やかな緑が茂る前方をぼんやりと眺めながら、今までの息苦しさや寂しさが徐々に薄れてゆく様な感覚に、彼女は意識せずに口元を綻ばせた。

(私でもこんなに落ち着ける時間があったんだ・・・)

声には出さずに、心の中でそう呟く彼女を、そっと柔らかな風が撫でてゆく。

哀しい事も、嫌な事も、絶望を感じる事も、この村に来てからはまだ一度も無いのだと言う事実が気付き、少女は僅かに驚く。

時間的にはまだ一日も経っていない事は理解しているが、それでもそんな事を感じないと言う事に彼女は素直に驚き、そして何より嬉しく思った。

「・・・もしかしたら、本当に神様が幸せをくれたのかも」

ふふ、ともう十数年浮かべる事の無かった柔らかな微笑みを、今度のはつきりと意識もして浮かべ、彼女は静かに頭上を見上げた。

雲ひとつ無い紺碧の青空。

少し先には眩しい程に輝く黄金の太陽。

時折森の木々から舞い上がって来る澄んだ声で歌う鳥達。

どれ一つ、見る事も少なかった要素であり、何時の日か癒しには成らないと彼女自身が切り捨てていた者達。

今はそれらが確かに心に光を与えてくれるものだと感じ、またそう思える事に少女は喜びを感じ、笑みをいっそう深くする・・・

その時だった。

前方、まるで森の中から囁くように、澄んだ青年と少年の狭間の声が響いて来た。

『闇を持つ少女よ。そこは貴方の為に用意した家。ここは貴方を守る場所。』

・・・何時の日か、その心の闇が消え去り光に満ちる日を、楽しみにしている・・・』

「っ！」

緩やかに紡がれた言葉に、少女は一瞬瞳を見張って森を見つめる・・・が、そこに人らしき存在は居ない。

(な、に・・・？ ううん、違う。・・・「何故」？)

言葉は出ず、胸中でそう呟く。

この声は何だ？ それよりも、何故そんな事を言ってくれる・・・？

疑問が伝わったのか、伝わっていないのか、柔らかな風が再び彼女を包むと、まるで優しく頭を撫でられた様な感覚が伝わる。

「っ」

反射的に上げた瞳が捉えたのは、美しい少年だった。

白い着物の着流し姿に、白い肌。
端正な顔立ちに、白銀の髪と空の様な蒼の瞳。

十三、四位の幼さを残す外見に似合わず、浮かべる微笑みはとて
も慈愛深く、少女はその微笑みと付いていけない現実に啞然とし、
その空色の瞳を見つめた。

ほんの数秒。もしかしたら数時間。

時間の感覚が無くなり、ただただ少年の瞳を見るだけしかしな
った彼女に、少年はそつと呟いた。

『貴方は私を守ろう。辛くなったら呼ぶと良い。ここにいる人々は
皆、そうやって日々を過ごしてきた。』

先程聞こえて来た青年と少年の間の声がこの少年から零れた事に
若干の驚きを感じながらも、彼女は問う。

「名前……？」

静かに少年を見上げながら呟いた彼女の言葉に、少年は温かい笑みをより一層深くし、彼女の頭をゆっくりと撫で続けながら答える。

『そう。過去を思い出して哀しくなった時、一人になって孤独感を感じた時、迷わず呼ぶと良い。』

私の名は・・・』

穏やかに紡がれたその名が、氷の心を砕く。

散った破片は次々と水になり、彼女の藍の瞳からもまた、寂しげな粒が次々と零れ落ちてゆく。

また、風が吹き・・・。

「あ・・・」

次に瞳を開いた瞬間には、涙と共に少年の姿も消えていた。

少女は確信する。

「ここには、本物の神様がいる」のだと。

「・・・」

無言の内ですら思いつきながら、少女はそっと立ち上がる。

彼女はもう一人では無い。

何故なら、次の一步を踏み出す時には、そっと傍で見守ってくれ

ているあの美しい少年の姿をした神様も、共に歩んでくれるのだから。。。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8872r/>

神様のいるところ

2011年10月8日22時09分発行